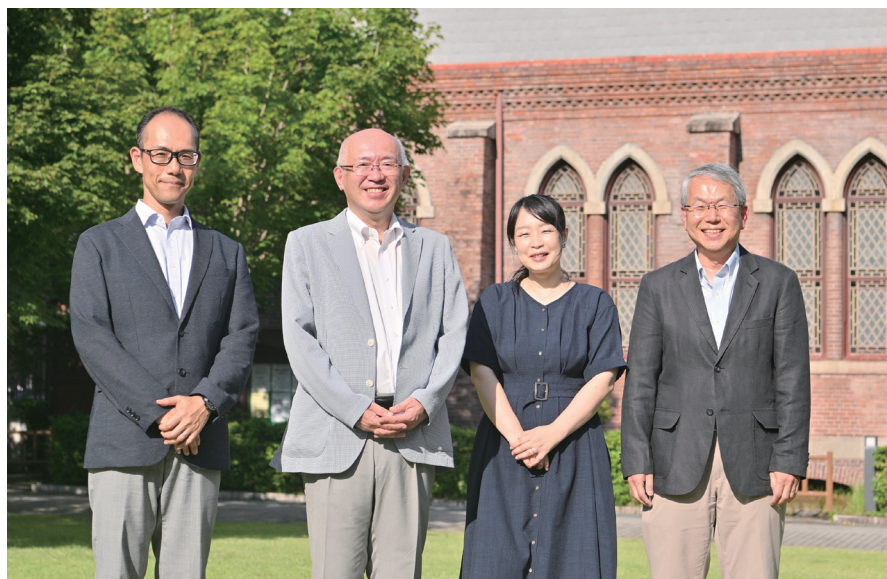


同志社の英語教育の歴史は、1875年に開かれた同志社英学校に遡る。一方、昨今の日本の英語教育は、小学校での外国語（英語）の教科化、中学校・高等学校での「英語の授業は英語で」という方向性など初等・中等での英語に関する指導要領においても、大きな変革期にある。加えて生成AIの出現は、教育に大きな影響を与えている。英語教育もその例外ではなく、今こそ、英語教育の真価が問われている。

本座談会では、各学校における英語教育の理念や特徴、近年の改革に触れながら、今後の英語教育の展望や学生への期待について、関係者それぞれの視点から意見交換を行い、今後の同志社の英語教育の姿について模索した。



同志社女子大学 表象文化学部 教授
わかもと なつみ
若本 夏美 氏

同志社中学校・高等学校 英語科教諭
いずた りょうこ
出田 涼子 氏

同志社大学
グローバル・コミュニケーション学部
教授
なかた よしゆき
中田 賀之 氏

同志社国際学院 初等部 教諭
にしむら こうじ
西村 孝次 氏



中田 賀之氏

同志社大学 グローバル・コミュニケーション
学部 教授

それぞれの視点から意見交換を行い、自らの取り組みを振り返ることで、今後の同志社の英語教育についても考えたいと思います。最初に、各校の英語教育に関する基本方針や特徴を伺います。まず、大学からお話しさせていただきませんが、昨年、全学共

各校の特徴的なカリキュラム

—習熟度別クラスから小学校のバイリンガル教育まで

中田 ● 本日は法人内の各校から、英語の先生にお集まりいただきました。昨今の日本の英語教育は、小学校における教科化や、中学・高校では「英語の授業は英語で」という方向性が進むなど、大きな変革期にあります。さらに生成AIの出現が教育全体に大きな影響を与えています。英語教育も例外ではなく、むしろ今こそ英語教育の真価が問われる時でもあります。本日は各校における英語教育について、それぞれの視点から意見交換を行い、自らの取り組み

通教養教育科目の英語科目について、全面的に新カリキュラムを導入しました。目指すところは、自律的に行動し、異なる価値観を受け入れながら社会に貢献できる人材の育成です。本学の教育理念と「ヨーロッパ言語共通参照枠（以下、CEFR）」などを基盤として構築し、「英語での専門領域を学ぶための体系的な構成」「習熟度別クラス編成」「習熟度に応じた科目履修」「きめ細かい学びを可能にする少人数制」を4つの柱としています。CEFRは、各言語について学習者の習得状況をレベルごとに細かく定めた国際基準です。

若本 ● 女子大学では、英語英文学科と国際教養学科以外の非英語専攻9学科で、1・2年次生が共通英語教育科目を4科目／8科目履修します。リーディングとライティングを中心とした「Comprehensive English I～IV」と、半分以上をネイティブスピーカーの教員が教える、スピーキングとリスニングが中心の「Communication in English I～IV」です。非英語専攻学科における英語教育については、コミュニケーション能力の養成という観点から十年以上議論を続けつつ、徐々に改革を進めています。例えば上級クラスを1つ作り、後はレギュラークラスを設けるという緩やかなストーリーミング制。あるいは1年次生秋にTO

EIC Bridge 試験を全員に実施し、成績によって英語能力の伸長の達成度を確認することとしています。

出田 ●私は同志社中学校・高等学校の高等学校で英語を担当しています。本校では幅広い領域を学びながら個々の興味関心を引き出し、学ぶ喜びを高めることができるように、理系・文系というコース制を取らず、多様な科目を自身で選択することができるカリキュラムを実施しています。昨年度学習指導要領が改訂され、高校の英語科目は「英語コミュニケーション」と、「論理・表現」の2種類に再編されました。これらの必修科目以外に自由選択科目としては、主にTOEICなどのスキルアップを目指す「英語資格講座」や積極的に英語で自己表現する力をつける「英語会話」、総合的な探究科目として「英語研究」などがあります。本校からは生徒の約85%が同志社大学・女子大学に進学するため、大学での研究に必要な英語力の育成を目標に、4技能をバランスよく学ぶことを目標にしています。

西村 ●同志社国際学院初等部では、授業全体の約半分を英語で教えています。1学年60人で2クラスがあり、1学年に必ず1、2人の外国人が副担任のような形でつき、校外学習やいろいろな教科の指導と一緒にいきます。まさに日常的に外国人の先生がいて、シャワーを浴びるように英語

を使う環境です。子どもたちは日常的な交流を自然に英語で行うようになり、4技能のうち「聞く」については違和感なくできるようになります。我々が最も重視していることは子どもたちがコミュニケーションを楽しみ、さらに自分から発信してくれることです。ただし本校はインターナショナルスクールではなく、学校教育法第1条で定められた一学校です。さらに文科省から認められた教育課程特例校として、国際バカロレアに基づく探究型の教育を行っています。6年間を通じて6つの教科横断型テーマをスパイラルのような形で学んでいき、6年生の最後には、探究の成果としてPYPエキシビションという発表をします。自分の興味のあるテーマを、質疑応答を含めてバイリンガルで発表するのがゴールです。

中田 ●言語学習の環境が充実しているだけでなく、子どもたちは学び合いをしているんですね。英語力のあるクラスメイトに慣れている大学生にとっては、「能力の違いがあるからこそ学び合えること」を理解することは容易ではないのです。それを早い段階から体験させているのは素晴らしい。将来出会うであろう多様な対話者とのやり取りの土台ができるわけですから。

教職員協働で約5年をかけた全学英語教育改革

若本 ●同志社大学の大規模な英語カリキュラム改革が動き始めた契機は、何だったのですか。

中田 ●私は2015年に本学に赴任し、グローバル・コミュニケーション学部で教えるだけでなく、全学英語教育にも関わっていました。2017年に、大学の教育支援機構でカリキュラムの検討部会を作り、懇話会のような形で始まったのが最初です。私の前任校が教育大学であったこともあり、私が英語科目担当者懇話会の座長を務めました。当時私が感じたのは、クラスの規模、カリキュラムの体系的、カリキュラムの本数といった観点から、改善の余地が大きいということでした。また本学では学習者の英語力の幅がかなり広く、独自の語学プログラムを展開している学部もあって、育成したい人材像、伸ばしたい英語力は必ずしも同じではありませんでした。途中からは全学共通教養教育センターが主体になり、私はワーキング・グループ代表として、まさに教職員協働で、合計約5年かけて改革に取り組みました。全学英語のカリキュラム改革には、様々な学部の先生方の理解が必要でした。そこで、ある程度力

リキュラムがまとまった段階で、希望があった学部の先生方とは、学部として育てたい人材像や語学力などについて色々と意見交換をさせていただきました。そこには、卒業生たちの社会貢献に寄与できるよう、英語を嫌いにならず将来につながるような有意義な学びを体験してほしいという共通の思いがありました。具体的には、どんな英語能力を1、2年生でつけさせるのかを議論し、一般的な英語から専門英語へと、シンプルかつ体系的な移行を考えました。2年生のリーディング・ライティングについても習熟度別クラスにしました。英語教育に長い歴史と伝統のある本学でこのような仕事ができ、私もやり甲斐がありましたし、大変勉強させていただきました。

若本 ●ありがとうございます。膨大な時間を費やされたのですね。

授業で大切にしていること

——英語は学ぶものではなく「使うもの」

中田 ●次は、授業の中で大切にしていることをお聞かせください。私は今年から、共通科目として「Intensive Advanced English」を担当しています。習熟度は上から

2番目の上級レベルの科目です。コミュニケーションを重視しているため、事前にCASECというコミュニケーションのテストを受けてもらいます。ただ初年度は、英語での授業に慣れている学生や帰国子女たちと、慣れていない学生間での学び合いが容易ではないクラスもあったと聞いておりました。そういう学び合いができる力こそが真のコミュニケーション力だと思いますので、私の授業では、学び合いや教え合いの環境・雰囲気作りを優先した授業づくりをしています。週2回の授業ですが、1回はテキストを使った普通の授業を行い、もう1回はグループ・プロジェクト型の授業をして、全体として複数の英語技能を統合した学びを目指しています。専門家の講演などを視聴できる動画配信サービスから、学生たちに興味あるテーマを選ばせ、教師役をさせて、シャドーイングや語彙の説明、プレゼン、ディスカッションを行わせます。私はファシリテーターのような役割です。必ずしもスピーキングが得意でない学生でも、自分が関心のある分野なら積極的に、またグループで協力しながら、聴衆からもフィードバックをもらいながら、楽しく学んでいます。

若本 ● 英語は学ぶだけでなく、使うことが最終ゴールだと考えています。また、実際に社会で英語を使う相手は、ほ



若本 夏美氏

同志社女子大学 表象文化学部 教授

きましよう。また日本人の英語の発音はノンネイティブの中では分かりやすく、外国で普通に通じます。学生には、もっと自信を持って国際語として英語を使いましよう、授業で強調しています。

出田 ● 高校では英語を楽しく学ぶのみならず、長い英文を読んだり、聞いたりする中で正確に情報を把握したり、発信することも必要になります。そのため基礎的な文法の知識や豊富な語彙力を身につけることは必要不可欠です。その上で生徒がしっかりアウトプットできる環境を作り出すのが、私たちの役目であると思っています。英語の授業のあり方は、以前とは随分変化しました。ICTを活用しつつ、できる限り一方的な授業ではなく生徒たち自身がイン

ばノンネイティブスピーカー。ですから学生にも、ネイティブの英語を目指すのではなく、国際語としての英語を目指すという点を強調しています。気後れせず、どんな英語を使ってい

タラクションを取る時間を確保できるよう工夫したりしています。習った表現を使えるようにしっかりと覚えたり、様々な教材を活用してアウトプットしたりできるようにしていきます。

西村●子どもたちには、英語によって人とつながって楽しかった、分かり合えたという経験をさせてあげたいという願いが中心にあります。とはいえ英語の学習経験はそれぞれ異なりますので、1年生から3年生までは授業内でランゲージサポートプログラム（習熟度別指導）も取り入れています。保護者からのニーズには英検合格もありますが、それより外国人の先生と子どもたちが話している姿を見るのが、一番嬉しいとおっしゃいます。

中田●その楽しさとは、表面的なものだけではなく、チャレンジングであることの楽しさや、エンゲージメントをした経験という部分もありますか。

西村●学年ごとに目標があります。例えば、1・2年生では友だちとチャットイングができる、3・4年生ではプレゼンができる、大きな声で自分の言いたいことが話せる。5・6年生では聞き手に合わせて柔軟に話したり、発表したりすることができる。段階を上っていったからこそその楽しみ、喜びがあると思います。

近年の取り組みと改革・課題

—進むICT化と小中高大連携への期待

中田●次は、各校での特徴的な取り組みや、近年の改革、課題があればお聞かせください。大学では授業外学習が多様化する中で、ICTを活用した学習に対応しています。基幹科目の「Core English」にeラーニングを導入したのが一例です。留学準備科目は、従来はTOEFLだけが対象でしたが、イギリス、カナダなどへの留学に対応してIELTSも扱うようになっていきます。今回のカリキュラムの大きな目的は自律的学習者の育成なので、それを目指したカリキュラムの体系化と各科目の目的の明確化をしつつ、学びの環境を整えていこうとしています。例えば2年生の上級科目「English for Academic Purposes」では、実際に論文を読んだりアカデミックなプレゼンの準備をしたりします。同じく上級科目の「English for Professional Purposes」は、ビジネスで使えるという明確な到達目標があります。それから、まだ可能性を探っている段階ですが、京田辺校地のラーニング・コモンズの大学院生スタッフに、専門科目のみならず語学の相談にも対応してもらう

ようになりました。学生たちが主体になり、先輩が後輩に教えるという学び合いの中で共に成長していく環境を作りたいと考えています。

若本 ● 女子大学でもラーニング・コモンズで、例えば英語のチャットルームやライティングサポートを行っています。特にスピーキングなどの個人サポートに人気があります。さらにスピーキングなどの練習をしたい学生のためにはネイティブの教員がいます。授業以外の自律的学習を促進するという観点からは、「スーパー英語」というサーバ型ソフトの利用を推奨しています。学習の自己管理については、クラウド型の教育支援サービス *manaba* を導入しています。これは英語学習だけでなく、あらゆる科目について教員が課題や指示を出すためにも利用していて、大変便利です。一方で、例えば協定大学留学希望者に *TOEFL* や *IELTS* 対策として合宿研修を行なっています。コロナ禍以前は多数の応募がありました。コロナ禍後は少なくなりました。合宿形式よりは、一対一で学ぶ形に需要があります。どういう形で授業の改革をしながら、授業外での周辺サポートも行っていかは今後の課題です。また現在大きなテーマとして議論しているのは定員数です。コミュニケーション能力育成のためのアクティビティなどを推進

するには、現在の40人から20人程度のクラスへの移行が望ましい。また英語英文学科および国際教養学科の教員は現在共通英語教育科目を担当していないため、企画担当主幹教員の設置が必要と考えています。

出田 ● 本校でもICT化が進み、多くの先生方が電子黒板やタブレットを用いて、生徒の理解がより深まるように授業を工夫しておられます。また本校では、*Teams* とクラウド型授業支援アプリのロイロノートをメインに授業や課題提出に使用しています。

中田 ● 高校でもICT化がかなり進んでいるのですね。一番遅いのが大学です。ICT化の進んだ小・中・高で学んだ子たちが大学に入ってくるわけなので、大学はもっと考えないといけない時期にきています。

若本 ● 大学では学生の間に *BYOD* (*Bring Your Own Device*) が浸透しているように感じます。コロナ禍を契機に自分のPCやMac、タブレットを持つ学生が増えました。

出田 ● 高校の課題としては、改訂された学習指導要領をベースに、限られた時間の中で生徒が確かな英語力を身につけるために何を重視して指導すべきなのかということが考えられます。中学校では以前より語彙数もかなり増え、高



出田 涼子氏

同志社中学校・高等学校 英語科 教諭

校で学んでいたような文法事項まで幅広く学ぶようになりました。高校では中学校までに培った英語力をベースに更に高度な英文に触れ、自己発信の機会を増やしていくことが望まれています。そのためには、学んできた語彙や文法の基礎固めを繰り返し、知識を定着させる必要があります。その中で、教科書の内容以外にも、スピーチやプレゼンテーションをする機会も取り入れたりして基礎的な英語力の向上を目指しています。高い英語力を持つ生徒はディスカッションに挑戦したりもしています。

若本 ●そういう意味では、同志社だからこそ法人校間で縦に連携し、英語教育について議論や相互サポートができるかもしれませんね。

中田 ●中高の話し合いを続けることで現状が共有され、気づき生まれ、徐々に変化が起こり、6年間の一貫したシラバスが作られるといいですね。私学の一貫校だからこそ

できることです。西村先生はいかがですか。

西村 ●小学校でも全員がiPadを持っており、ロイロノートも利用しています。創立して11年の学校ですので、改革というより、今も積極的に新しいことを取り入れ、それが徐々に浸透している段階です。3年前からは、タブレットを使ったピアソンというテストサービスを導入しました。そこではCEFRのB1という能力レベルを基準に、英検2級程度のレベル到達を目標にしています。大半の子どもたちが、そのレベルまで達します。英検を受ける生徒は多く、6年生の時点で準1級の合格者は1学年に3、4人います。2級合格者も多いです。コロナ禍ではアメリカへの修学旅行はできませんでしたが、現地では丸1日、現地の学校と英語で交流することもしています。そうして英語中心の学校を卒業したという自信を持ってもらうのが本校の願いです。

生徒・学生への期待と我々の責任

——英語を使う意識を高め自律した学習者を育てたい

中田 ●次は、生徒や学生への期待についてお聞かせください。私は、多くの学生たちに「大学時代に英語を好きでい

られた、頑張った」という経験をさせて、達成感を得てもらい、何事にもやり抜く力を身につけてほしいと思っています。我々の責任は、学生たちの素晴らしい感性を大切に、彼らが他者に伝えたいことを発表できる確かな機会を提供することです。学び方や英語力の伸ばし方にも多様性があるので、テストスコアで測ることができない学生の活動や反応をモニターして、フィードバックして、彼らの感性を引き出すように導きたいですね。

若本 ● 学生には、英語を「学ぶ」段階で終わらず、英語をもっと「使う」意識を持つてほしいですね。失敗してもいいので、学内でもっと学生が主体になって英語を使っている。教員が踏み台になるようなことも含めて、サポートするタイプの授業を多く作っていきたいと考えています。各国のノンネイティブの特徴的な英語についてリスニング能力を強化することも大事になるでしょう。

出田 ● お二人の熱い思いが伝わってきて、高校教員の責任の重さを痛感します。今の高校英語の教科書で素晴らしいのは、東京スカイツリーの構造やイースター島のモアイなど、多様な分野を一冊の中で学べることです。英語が使えようになる以前に、世の中の様々なことに興味を持ってもらうのが私一番の願いです。知りたい、学びたいという

気持ちがあつてこそその英語教育。知的好奇心を持ち、英語を使って自分の興味を深め、それを英語で発信できる人に育ってもらえればと思います。

西村 ● 本校では、探究と英語がワンセットになっています。6年生のエキシビションでは、自分で選んだテーマを半年ぐらい研究します。日本語のサイトだけで不足なら、英語のサイトも調べる。英語によって世界のいろいろな人とつながれる。いずれは世界の人たちとコミュニケーションをとり、世界をリードしていく人になることができる。そういう目的を私たちは子どもにたくさん伝えることができます。子どものモチベーションをどんどん上げることができます。

若本 ● 国際学院のような素晴らしい環境を、小学校だけでなく中・高・大学でも作るのは可能だと思います。そういうプロジェクトができればいいですね。

生成AIへの対応を含めた今後の展望

中田 ● では最後に、今後の展望をお願いします。大学の新しいカリキュラムは2年目でまだ移行期にあるため、4年後に検証を行い、運用面の改善を考える必要があります。大事なのは自ら行動して社会貢献できる人材の育成なので、そ



西村 孝次 氏

同志社国際学院 初等部 教諭

の目標に向かうための運用を考えたいと思います。

若本 ●女子大学も継続して、カリキュラムや授業の改善を行っていきたいと考えています。特に大学生生活前半の2年間で英語学習を終えるぐらいの短期集中型にできないかと考えています。少人数制や、ICTその他の教材を活用した授業外学習も取り入れつつ、自律的な学びを進めていくことが今後の課題です。

出田 ●高校では昨年度改訂されたカリキュラムを3年間通して行い、フィードバックをしつつ、より理想に近づけるように教員自身もスキルアップしていく必要があります。生成AIは本校でも問題化していますので、その対応も必要です。そのためには、やはり法人内の縦の連携が必要か

と思いますので、宜しくお願いします。

西村 ●生成AIについては、探究の観点から言えば、物事を調べてまとめる段階までは使ってよいと思います。その後さらに深める、低学年の子に教

える、地域に働きかけるなど、アクションを起こすのは子ども自身。そういう棲み分けができていればよいと、子どもには伝えていきます。小学校では、子どもたちがアウトプットしたくなるようなインプットの仕方を、今後も積極的に考えていく必要があると思います。今日は非常に勉強になりました。

中田 ●生成AIは避けては通れない問題です。大学では6月に、学生に対して指針を出しました。使い方をまず知っておく必要があることと、使い方を知らない人が使うと問題が起こる危険性もあることを伝えていきます。今こそ、最終的に身につけたい力や人材像を考え、そこから逆算して生成AIの使い方とともに授業のありようの原点を考えていく必要があるかと思っています。本日はありがとうございました。

(2023年7月21日、今出川校地にて)